

「臨地実習ガイドライン 2021」に沿った未来の臨床検査技師の育成

◎片渕 直¹⁾

社会医療法人財団白十字会 佐世保中央病院¹⁾

2022年入学生から適用された臨地実習に対応した「臨地実習ガイドライン 2021」の第2版が発行された。新カリキュラムの重要な改訂ポイントは「必ず実施させる行為」、「必ず見学させる行為」、「実施させることが望ましい行為」、「見学させることが望ましい行為」に関する評価基準書が追加された。これによって実習内容や評価の統一化が期待される。臨地実習単位も従来の7単位から12単位に改定され、さらには生理学的検査については3単位以上の実習が求められるようになった。これらの改訂で、実習内容はチーム医療にまで拡大し、検査室での実習も見学型から参加型に変更された。

当院は312床、36の診療科を標榜している急性期病院であり、臨床検査技術部は29名所属し、そのうち臨地実習指導者は1名である。

実習のローテーションは生理学的検査に関する実習は時間が定められたことにより見直しを行った。チーム医療の現場や検体採取、ベッドサイド検査など件数が少ない行為については臨機応変に実習機会を提供できるよう工夫している。

私は主に病理検査業務を担当している。実習生には、検体回収から切り出し、標本作成など可能な限り実践的な実習してもらっている。当院では、エコーや穿刺など検体を採取する際には技師がベッドサイドへ出張し、医師より直接検体を受取って目的に合った処理を行っている。実習生にはその場にも同行してもらい、検体の採取から処理に至る実務と他職種との連携を同時に学ぶ貴重な機会としている。

このように「臨地実習ガイドライン 2021」に沿った臨地実習を通じて、実践技術の統一的な修得だけでなく、臨床検査技師としての役割と責任を自覚し、チーム医療の一員として主体的に関わる医療人の育成に力を注いでいます。

連絡先：0956-33-7151